

「創造的な仕事」への折りあいとキャリア形成

——ベテランアニメーターへのインタビュー調査から——

長野大学 松永伸太郎

1. 目的

本報告では、創造性・芸術性と労働概念をどのように関連づけて考えていくべきかという問題に対して、それが社会学者以前に労働者にとっての問題であることを、商業アニメ制作に携わるアニメーターを事例に議論する。アニメーターという職業は、高度な作画技術を要求される技能職であり、完成した作品には芸術的な評価が与えられることもある一方、細分化した工程間分業のもとで裁量が制約された中で仕事を遂行していく必要がある。その結果として、しばしばアニメーターは日々の仕事の中で自らが行いたい作画ができないなど、創造性が望んだように発揮できないという問題に直面する。本報告では、こうした問題に対してアニメーターはどのように対処しているのかについて分析を行う。

2. 方法

アニメーターとして働き始めて30年前後の職務経験を有するベテランアニメーターに対して実施した、自らの仕事のやりがいやキャリア形成に関するインタビューデータを分析する。創造性・芸術性と労働に関する先行研究は、彼らが不安定な労働条件に対処するために形成するネットワークに焦点化する傾向があるが (McKinlay and Smith 2009)、本報告では彼らがそうしたなかでも職業生活を営むうえで、自らの仕事それ自体とどのように向きあってきたのかに着目する。これによって、彼ら／彼女らが職業生活上においてどのようにして自らの仕事の創造性を意味付け、折りあいをつけつつキャリア形成をしてきたのかについて明らかにする。

3. 結果

ベテランアニメーターの創造性への対処は多様であったが、その対処は偶発的に得られた仕事をいかにこなすかや、工程間分業のもとに自らをどう位置づけるかといった、キャリア形成上の問題と不可分のものだった。あるアニメーターは若手時代から裁量の制約が少ないデザイン的な職務に関わっていったために、アニメーターに限られない絵描きとしてファンからの評価も意識する必要があった。また別のあるアニメーターは、工程間分業に自らを適応させていくうちに、自らの仕事を創造的なものとは考えなくなっていったが、与えられた作画の職務を的確にこなすことに新たなやりがいを見いだすようになっていった。

4. 結論

アニメーター達は、各々の仕方で、その職業生活の中で、創造性と労働の概念を積極的に結びつけるべきかどうかという問題に取り組んでいた。そしてその結びつけ方は、アニメーターとしての職業生活のあり方と密接な関係がある。こうした知見は、創造性・芸術性と労働の概念の関連性を考えるうえで、労働者が職業生活において用いている概念の側から捉えていくことの重要性を示唆している。

文献

McKinlay, A. and C. Smith (eds), 2009, Creative Labour: Working in the Creative Industries, Palgrave Macmillan; Basingstoke.